

1 年生になったら…（その 3）

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

絵にあるような、桜花爛漫の入学式を迎えたのは小学生ばかりではありません。袖丈も肩幅も、文字通り身の丈に余る制服に身を包み、一見してそれとわかる初々しい中学生も新 1 年生です。迎えてくれた桜も葉桜となって、新緑、薫風と、健やかな子どもの成長を連想するにふさわしい頃になりました。5 月 5 日は「子どもの日」、古くは江戸時代から男の子の節句とされ、武家では幟を立て甲冑を飾り、町人も鯉幟を立て武者人形や刀を飾り、等しく男の子の健やかな成長を願い、祝ってきました。邪気を払うため菖蒲や蓮を軒にさす風習も今に続いています。一方、5 月初旬の思わぬ寒気によって、農作物の瑞々しい新緑が襲われることがあります。八十八夜の忘れ霜と呼び、農業に関わる人々から恐れられています。

人としての成長過程、いわば”青の時代” 青年期に思わぬ忘れ霜に見舞われることがあります。それは、あたかも瑞々しい生命力あふれる若菜を襲う、忘れ霜の襲来を思わせるものがあります。

石上涼太君（仮名）は、4 月に市立〇〇中学に入学したばかりの元気なピカピカの 1 年生です。祖父と母親が地元で小児科医院を開業しており、「地域の人達から親しまれる家庭医でありたい」という強い希望があり、わが子が地元の公立中学に進むことにも何の迷いがなかったと言います。両親も共に地元の小・中学校の出身です。父親は石上小児科（仮名）の一子ですが、高校時代に、ボランティアを通して社会福祉に関心を持つようになり、大学は医学部に進まず、社会福祉系大学で学び、大学院にも進んで研究を重ね（社会学博士）、現在は母校で後輩の指導に当たっています。母親は、幼い頃小児喘息を患い、しばしば石上先生のお世話になり、小児科医に憧れるようになり、医大に進んで小児科を専攻して、卒業後は石上医院で家庭医としての実践も学んで、望み望まれて、石上家に嫁ぎ、舅が経営する石上小児科の医師になりました。事情を知っている地元の人からは、今もって洋子先生（仮名）と呼ばれています。ご本人も、この呼び名が大好きと言います。

こんな健全な家庭に育った涼太君は、何の問題もなく健やかに育ち、中学入学の日を迎えました。入学式には両親そろって出席しました。そこで、ちょっとしたアクシデントがありました。それは両親が並んで保護者席に着いたとき、校長がやってきて、「あちらに席が用意してあります」と、懇懇に挨拶しました。それというのも、母親は地区在住の小児科医として、教育委員会から校医の委嘱を受けていたので、来賓席が用意されていた故のことでした。母親は一度は辞退しましたが、父親（夫）の勧めもあり、公的な立場を考えて、席を移り、保護者席には父親 1 人が残りました。

それは近くにいた多くの人が見ていたことで、誰しも違和感を覚えることではありませんでした。ところがそれは、涼太君にとっては思いもかけなかった忘れ霜の襲来でした。

（平成 29 年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業）

入学式から8日目の夜、涼太君は診察室にあった母親の白衣に鋏で切り傷をつけてしまいました。母親は、いつ誰が何のためにこんなことをしたのか、不審に思いながらも、むしろ不審なるが故に、誰にも言わず、様子を見ていました。ところが、涼太君の行為は夜な夜なにますますエスカレート、20日目の夜半には、ラシャ鋏で白衣を切り裂いてしまいました。ここに至って、母親は、夫にも、舅にも姑にも、ことのなりゆきをすべて話して対応を相談しました。みんなは驚きながらも、真剣に考えましたが、他に異常行為は見当たらないことから、何らかの意味で母親へのサインであろうとの意見で一致しました。これを受けて母親は、涼太君と二人きりで、診察室で話し合いました。以下、母親の訴えを、一人称でありのままに記します。

診察室に入るや涼太は立ったまま、「僕をここへ呼び入れたのは、診察なの？ 聴取なの？」と聞きました。その鋭さに私は一瞬たじろいでしまいましたが、やっとのことで踏みとどまって、診察席ではなく、面談室の背もたれのついたキッチンにでもあるような椅子に座り話し合いました。ここ（診察室）で話し合いたいと言ったのは、診察でも聴取でもありません。貴方のしたことは、貴方が一番よく知っていると思うが、「何が（なぜ）あなたをそうさせたのか？」その辺りのことを母親として知りたかった。もっと言えば、貴方の行為は私へのサインだと思ったが、そのサインを送った胸のうちを聞きたかった、と伝えました。涼太は「母親として知りたかったと言うのは、本当でしょうね」と念を押した上で、語った言葉、その真実、その意外性に私は言葉を失いました。

話は入学式の日に遡ります。私は夫と共に保護者として参列したのですが、校長からの要請で、校医として、来賓席に移りました。面映い思いもあったのですが、式の始まる時刻も迫っており、周囲の人も見ていた中でのことで、公的立場を優先すべきとの咄嗟の判断によるものでした。

ところが、これが涼太の友達との間で大きな話題となって、「君のお母さんは医者だというが、それだけでなく、地域の有名人なんだね」などと、話しかけられることが多くなったと言います。それは決していじめでも、悪意でもないことは分かっているが、度重なると次第に重荷となってしまい、医者であり有名人のお母さんより、ピンクのトレーナーを着て、近所のおばさんと立ち話をして笑って入るお母さんの方が「僕のお母さん」という思いが強くなった、とも言いました。夜になると、その思いは更に強くなって白衣のお母さんの姿が嫌になり、眠れなくなってしまい、起きだして、白衣を切ってしまった。一度やると、やめられなくなってしまった、と一気に語り、「ごめんなさい、ごめんなさい」と幼子のように泣き出してしまいました。私は黙って引き寄せ、抱きしめ、その背を撫でてやるのが精一杯でした。

これは現在形の生々しい実話です。相談者は小児科の家庭医であり、子育て真っ最中の母親です。改めて、青年期前期（13～15歳）の萌え出ずる新緑のころに例えられる成長期のするどい感性と、反面の脆さを思い知らされました。更にはこの期を襲う、忘れ霜に例えられる危機を思いました。それに真正面から真向い、共に考え乗り切るのも、母親であり家族だと厳しく教えられました。

○ 忘れ霜 今しひそかに結ぶらむ するどく星のひかり冴えつつ 岡野豊彦 『忘れ霜』

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈健全な家庭とは〉 ◆多感な成長期の子供の心情に絡む相談が数多く寄せられます。子供の成長過程において、悩みを持たない家庭などありません。大切なことは問題発生時の家族の対応です。◆僅かな兆候を見逃がさない。親が子供と真剣に向き合い、一緒に解決に当たる。どの家庭も、こうして家族の危機を乗り越えてきました(h)。